

9月25日（日）15:00／第3臨時発表会場（バドミントン練習室）

07発-25-口-13

1日および学校の休み時間における児童の身体活動状況

○佐藤 舞（早稲田大学）、石井 香織（早稲田大学スポーツ科学学術院）、
岡 浩一朗（早稲田大学スポーツ科学学術院）

目的：児童における中等度以上身体活動（MVPA）の実態を明らかにすること。方法：対象者は埼玉県2小学校に在籍する児童230名とした。加速度センサー付歩数計の7日間連続装着により、平日及び学校の休み時間（中休みと昼休みの合計40分）における MVPA 実施時間（分）、1日に占める休み時間の MVPA 実施時間の割合（%）を評価した。各指標における男女差及び学年差について二元配置分散分析を用いて検討した。結果：分析対象者は有効データが3日以上ある165名（男子50%、低学年47%）とした。各指標において交互作用及び学年の主効果は認められなかった。性に有意な主効果が認められ、平日（男子 86.0 ± 2.7 、女子 70.0 ± 2.8 、 $F(1, 161) = 16.95$ ）及び休み時間（男子 9.6 ± 0.4 、女子 5.8 ± 0.4 、 $F(1, 161) = 41.41$ ）の MVPA 実施時間、1日に占める休み時間の MVPA 実施時間の割合（男子 11.1 ± 0.5 、女子 8.7 ± 0.5 、 $F(1, 161) = 12.63$ ）は女子と比較して男子が有意に多かった（全て $p < 0.001$ ）。結論：平日及び休み時間の MVPA 実施時間は男子のほうが長かった。

9月27日（火）9:30／第3臨時発表会場（バドミントン練習室）

07発-27-ポ-14

幼児期における体力・運動能力の個人差

—加齢に伴う分布の変化に着目して—

○春日 晃章（岐阜大学）、中野 貴博（名古屋学院大学）、村瀬 智彦（愛知大学）

〔目的〕子どもの体力低下は既に幼児期から出現し、運動遊びをする子としない子の体力・運動能力の二極化も大きな問題となっている。本研究の目的は、幼児期における体力・運動能力に関して、加齢に伴って個人差がどのように変化していくのかについて測定値の分布変化に着目しながら検討することを目的とした。〔方法〕3歳から6歳までの幼児6,215名（男児3,143名 女児3,072名）に対して立ち幅跳び、握力、長座体前屈、体支持持続時間、25m 走、ソフトボール投げおよび反復横跳びの7項目のテストを実施した。

0.5歳区分の年齢別および性別の平均値と標準偏差（SD）を基に $\pm 3SD$ から外れる値を取り除いた後、項目毎に度数分布表（年齢別・性別）を作成し、歪度を算出し加齢に伴う分布の変化特性を分析した。〔結果〕体支持持続時間と反復横跳びは加齢に伴い左よりの分布（値の低い子が多い）から左右対称に変化した。立ち幅跳びと長座体前屈は全ての年齢段階で左右対称の分布を示し、加齢変化は認められなかった。25m 走は右よりの分布を、握力とソフトボール投げは左よりの分布をいずれの年齢においても示していた。

発

9月27日（火）9:34／第3臨時発表会場（バドミントン練習室）

07発-27-ポ-15

幼児の肥瘦度判定についての検討

—女兒の体脂肪率評価と身長に対する体重の多項式回帰評価との比較より—

○酒井 俊郎（浜松学院大学）、藤井 勝紀（愛知工業大学）、出村 慎一（金沢大学）、
宮口 和義（石川県立大学）、青木 宏樹（金沢大学）、野口 雄慶（福井工業大学）

小児肥満の増加は、我が国のみならず世界規模で問題となっている。肥満は「体脂肪が異常に蓄積した状態」と定義されており、子どもの肥満問題の検証には身体組成に関する詳細な情報が必要である。しかし、体脂肪を簡便かつ正確に測定することが難しく、教育・保育現場では身長に対する標準体重を用いて肥瘦度判定を行っている。そこで本研究は幼児の体組成測定を行い、体脂肪率により肥瘦度を判定し、身長に対する体重の回帰評価による肥瘦度判定との比較により、幼児における身体組成測定の妥当性について検討を行った。対象は東海地方の幼稚園に通園する女児332名（3歳：92名、4歳：134名、5歳：106名）であった。マルチ周波数体組成計（Tanita 190EM）を用いて体脂肪率を測定し、肥瘦度（5段階：痩身、やや痩身、標準、やや肥満、肥満）評価を行った。そして、その分布結果を身長に対する体重の多項式回帰評価チャートから判定された肥瘦度（5段階評価）と比較した。各年齢毎に「体脂肪率から判定された肥瘦度」と「身長に対する体重の回帰評価チャートから判定された肥瘦度」を比較検討した結果、有意差はなく、体脂肪率評価による肥瘦度判定の妥当性が示唆された。